



巻頭言

一 病 息 災

財団法人 日本植物調節剤研究協会 評議員
株式会社 エス・ディー・エス バイオテック
取締役 登録・環境統括

笹本忠夫

巻頭言として“一病息災”という言葉が相応しいかどうか疑問ですが，広辞苑によれば“持病ひとつぐらいある方が，無病の人より健康に注意し，かえって長生きであるということ”とあります。

ここ数年，定期健康診断だけでなく自社の健康センターとの付き合いが頻繁になってきて，健康上いろんな面での悪影響が出始めたことに気がつきました。その原因は，解析するまでもなく十数年前の飲酒によるものであることは，行動をともにした友人達の体験談を聞けば明々白々です。当時は，農薬業界も右肩上がりの成長期にあり，農業に貢献できる新農薬の創製開発に燃えていた時期で，様々な将来の展開について，所属機関，職種，職務，年齢を超えて夜な夜な酒を交えて議論を交したことが思い出されてきます。

食糧確保・増産の時代から豊食・飽食・高付加価値の時代へと食文化が移行分化するに従い，業界も様相が一変し，農薬の出荷額は平成6年4200億円をピークに減少し，業界再編が進み，国内外のメーカーが生き残りをかけるような厳しい状況になってきました。新聞では，国力の源泉となる第一次，第二次製造業種を専攻選択する若者は減少の一途であることを告げ，第三次，第四次産業への就業集中が，国内農業の将来に与える影響は，WTO農業交渉における輸入枠拡大や恒常的な水稻減反と同様に脅威であります。近年，大量に輸入された生鮮野菜が国内農業生産と食の安全という観点から，国はセ

ーフガードを発動しましたが，この中で農薬登録保持者に対しては，新しい毒性ガイドラインによるデータ要求，さらには環境における生態影響試験等を要求し，これらが新規剤開発費や既存剤登録維持費の増大に結びついております。

そして今度は農薬取締法が改正されたことから，農薬の製造販売に関する社内管理体制の一層の強化が必要となり，開発研究費逼迫，予算確保と数字業務に勢力を消耗し，十数年前とは異なった方法で心身を酷使した結果，健康診断書の数字に一憂している自分を見出しています。

歳こそ違え，この心身に対する影響発現の違いは，かつては失敗を恐れず前向きに全員で夢を追いかけていたのに対して，現在では，最少の人員で最小の費用で効率良く，短期間でかつ失敗せずにリターンを得るための回廊に入り込んでいるからではないかと思います。こういうと昔は良かったという繰言になるのですが，手段手法は変わっても，いつの時代でも新しいものを産み出す喜びとそこに居合わせた喜びは何事にも変えがたいことだけは確かです。私の一病の要因となったであろう飲酒論議は，酒だけでなく，諸先輩同胞の知識知恵も一緒に飲み込むことが出来たと思っています。

最後に，無病息災で人生を全とうするのが最善なのでしょうが，個人的には一病息災でいくのがより長く人生を堪能できるのではないかと思います。また中国では“無病短命，一病長寿”といわれていますよ。